

第2章 筑紫野市の文化の現状と課題

1. 筑紫野市の文化の土壌

文化振興の基盤は、まず地域を知ることからはじまります。自然の移り変わりや人々の営みの歴史は、筑紫野という土地でどのように生き、どのような文化を育んでいくかという道しるべとなります。

本市の遺跡については、旧石器時代からみることができます。

弥生時代には、中国製の鏡や沖縄の海でしか取れないゴホウラ貝で作った貝輪をもつ首長墓等が発見された隈・西小田地区遺跡（美しが丘）があります。

古墳時代になると古式の前方後円墳で三角縁神獸鏡が3面出土した原口古墳（武蔵）や、装飾古墳で国の史跡に指定されている五郎山古墳（原田）が築られました。

奈良・平安時代では、市北部は「大宰府条坊」とよばれる都城域に入り、多くの関連する遺跡が市内各地に散在しています。また、大宰府から鴻臚館や豊後、さらには肥前・肥後に向かう官道が四方に伸びていたと考えられています。

江戸時代には、長崎街道、薩摩街道、日田街道が筑紫野の地で交差していたことなどから、二日市宿や筑前六宿に数えられる山家宿、原田宿が整備されていました。また、本市の特徴の一つである二日市温泉も、「吹田の湯」としてわが国有数の歴史をもち、交通の要衝としての性格と温泉、商業が結びつき、近世以降の発展を支えてきました。

明治に入ると、九州でいち早く博多・久留米（千歳川仮停車場）間に鉄道が通り、二日市と太宰府や朝倉地方を結ぶ軌道も敷設されました。そして、江戸時代に34あった村も1889年（明治22年）に二日市村（後に町）・山口村・御笠村・筑紫村・山家村へと合併しました。この1町4村については、地勢的、歴史的に、それぞれ独自の文化を育んできており、それは今日の本市の文化に強く影響を残しています。

さらに1955年（昭和30年）3月1日にこの1町4村が合併して筑紫野町となり、1972年（昭和47年）4月1日に市制を施行し、現在に至っています。

このように本市は数多くの文化財を有し、また交通の要衝としていにしえより栄えてきました。現在でもJR九州鹿児島線、筑豊線、西鉄天神大牟田線、太宰府線などの鉄道、九州自動車道、国道3号、200号、386号などの道路をはじめ九州の主要交通が集中しています。そして、そのような交通の利便性から大型住宅開発が進められ、福岡都市圏を中心に市外から多くの人々が移り住んできています。

また市内において、文化会館や博物館、生涯学習関連施設を活用してさまざまな文化活動が展開されていますが、近年は市民自身の主催による落語やミニコンサートなどの草の根的な文化活動も広がっています。さらには、隣接する太宰府市に九州国立博物館が開館したことで市民の文化財等に対する意識も高まってきています。

さらに本市では、1995年（平成7年）に「人権都市宣言」を行うなど、「人権尊重のまちづくり」を推進してきました。あらゆる分野において人権尊重の視点に立った施策を総合的に進めるため、2007年（平成19年）には「人権施策基本指針」を策定し、さらなる取り組みを進めています。文化振興においても、すべての市民が心豊かで、自分らしくいきいきと暮らせる社会を実現していくことが期待されています。

2. 文化振興にあたっての現状と課題

市民の文化的な環境を豊かなものにしていくためには、文化振興に対するニーズ、時代の変化を捉えた施策の展開が必要です。

よって、本計画を策定するうえでの現状と課題を以下のように整理します。

(1) 少子高齢化等の進展

本市は、人口、世帯数ともに年々増加して、平成 20 年 3 月末日現在で人口 98,791 人、世帯数 38,330 世帯となっていますが、近年その伸び率も低く、1 世帯あたりの人口も減少し、核家族世帯の占める割合も増えています。

また、総人口に占める 14 歳以下の人口割合は年々低下し、少子化の進行がうかがえる一方で、65 歳以上の人口割合は、全国や福岡県全体の割合より低いものの年々増加しており、高齢化率は 17.1%（平成 20 年 3 月末日現在）に達しています。

このような核家族化や少子高齢化等の進展にともない、地域文化等を保存・継承していくことが困難になっているなかで、子どもたちの郷土愛や感性をいかに育てていくのか、また増加する中高齢者のまちづくりや文化活動の場をどのように確保していくのかを考えていく必要があります。

(2) 潤いのある生活や心の豊かさへの希求

国の「国民生活に関する世論調査（平成 20 年 6 月調査）」等によれば、今後の生活において「これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」と回答した人の割合は 62.6%となっており、その割合は高くなってきています。

このように市民一人ひとりが、潤いやゆとりを実感できる暮らしや自分らしい創造性のある生き方を求めるなかで、文化というものに対して大きな関心をもつようになってきているものと考えられます。

本市では、文化会館や生涯学習センター、博物館等を拠点に、さまざまな文化活動が行われていますが、文化活動に関心が薄い人、また関心があってもさまざまな要因により活動に結びつけることが難しい人も少なくありません。文化に対する潜在的な関心や活動意欲を喚起するとともに、多様なライフスタイルに合わせ幅広い市民が文化活動へ参加できる環境づくりや、文化に関心のある市民が文化活動を始めるきっかけとなるような事業等を行っていく必要があります。

また、まちなみなどの景観は人々に潤いや安らぎを与え、また懐かしさを感じさせる重要な要素であり、地域の歴史的、文化的特色を活かした美しい景観づくりを行っていくことが必要です。

(3) 情報化社会と広域的な交流の進展

インターネットに代表されるような情報通信技術の発達によってさまざまな情報媒体を利用して、近隣都市だけでなく全国の情報を収集し、また全国へ向けて情報発信することが容易に行えるようになってきています。

本市は、歴史性をもった豊かな文化資源を有していますが、福岡都市圏のベッドタウン都市として急速に発展してきたため、市外から転居してきた人も多く、地域の歴史や文化に対する市民の理解度は必ずしも高いとはいえません。

ふるさととしての筑紫野を大切にし、市民としての一体感を高めることができるよう、筑紫野の豊かな文化資源を活かした取り組みを進め、内外に向けて積極的に情報発信していくとともに、市民の理解と参加を求めながら、新たな筑紫野のイメージづくりを行っていく必要があります。

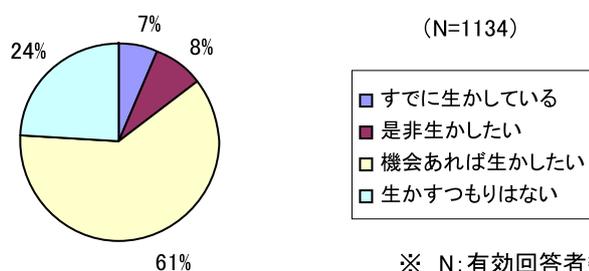
また、さまざまな活動主体との連携、支援や他都市との広域的な文化交流をはかり、相互理解を深めていくことは、文化活動の質や内容を高めていくうえで重要な基盤となるものであり、一層の推進をはかる必要があります。

(4) ボランティア活動等の拡大

本市においては、地域や文化会館、図書館などの文化施設において、さまざまなボランティア活動が広がりはじめ、ボランティア活動に対する市民の関心も非常に高くなっています。

平成17年1月に実施された筑紫野市生涯学習市民意識調査では、「自分が持っている知識・技能を、ボランティア活動等を通して地域のために生かしたい」と考えている市民は、76%となっていますが、実際にボランティア活動を行なっている人は7%にとどまっており、意識と行動の乖離^{かいり}が顕著にみられます。

市民の意欲を実際の行動につなげることができるよう、気軽にボランティア活動へ参加できるしくみや環境づくりを、NPO*やボランティア団体等とともに進めていく必要があります。



知識・技能を地域のために生かす (「筑紫野市生涯学習市民意識調査」より)

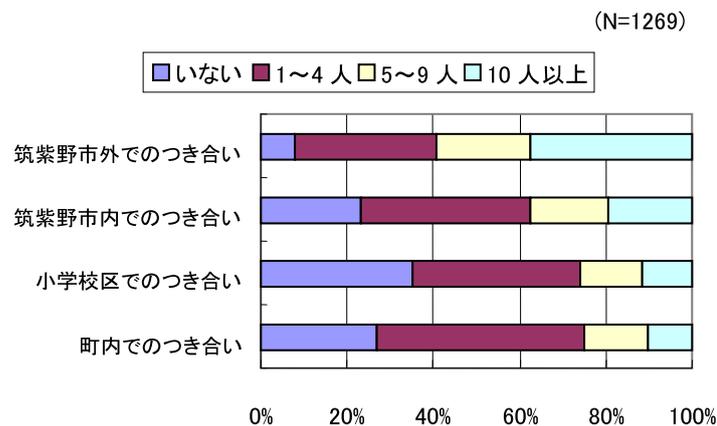
(5) 地域コミュニティ*基盤の変化

市民の交友状況をみると、下の図表にみられるように、居住地からの距離が広がるにつれて交友量が増えていく傾向がうかがえます。その要因として、市外からの転入者がかなりの割合を占めるようになってきていることや、市外へ通勤通学する市民が多く、生活の多くの時間を市外で過ごしている（あるいは過ごしてきた）ことが考えられます。このため、身近な範囲での付き合いがなかなか発展していかないなど、地域における人間関係や連帯意識の希薄化等が懸念されています。

また、モータリゼーション*の進展等から郊外型商業施設の建設が増える一方で、中心商業地では、都心人口の減少や都市機能更新の遅れにより求心力が低下し、中心市街としての活力が低下しつつあります。

地域社会の活性化を促す「文化力」に着目し、個性豊かな地域の文化を活かしたイベントなどの開催や、多彩な人材等を活かしながら、質の高い魅力ある地域づくりを推進していくことが求められています。

また、文化と産業等とをうまく調和させながら、活気があふれるまちづくりに向けた施策のあり方を探っていく必要があります。



親しくつきあっている人の数（「筑紫野市生涯学習市民意識調査」より）

(6) 文化施設に対するニーズの変化

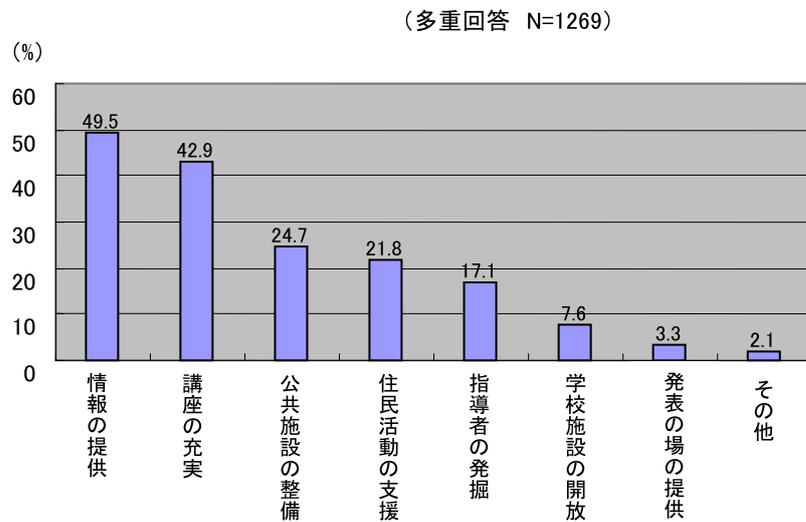
市民が文化活動を行うには、鑑賞の場及び日頃の活動成果を発表する場が必要です。

本市の文化関連施設としては、文化会館やコミュニティセンター、図書館、博物館などがあり、その施設の多くが点在化していますが、各施設が関連事業における相互利用や情報の共有化を行い、市民の利便性の向上をはかっていく必要があります。

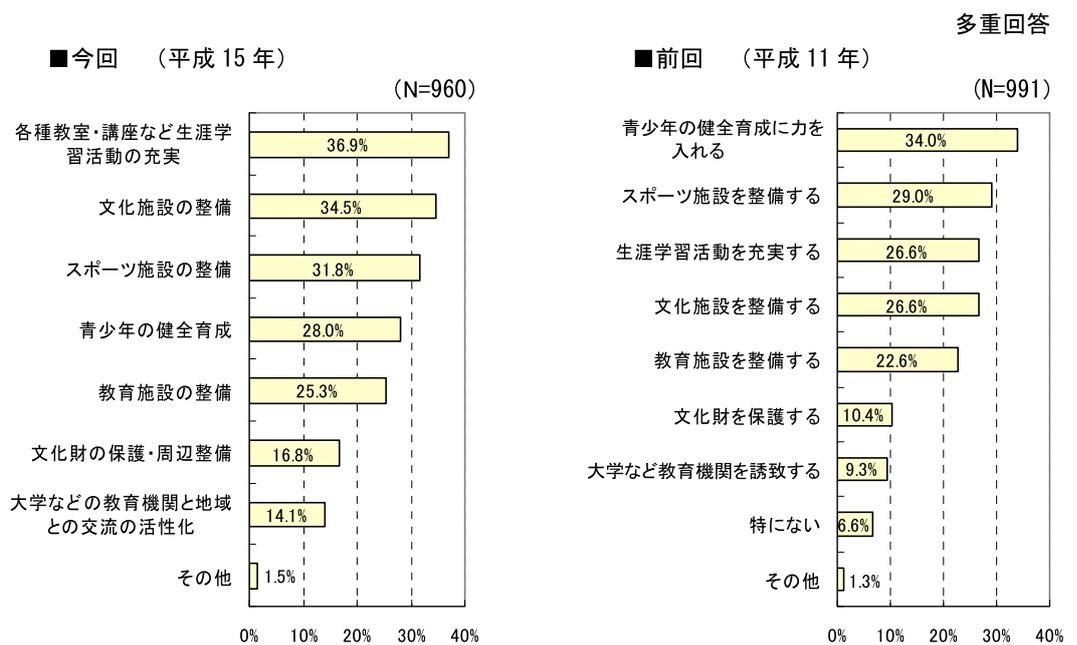
平成17年1月に実施された筑紫野市生涯学習市民意識調査においては、生涯学習に関する市への要望（複数回答可）として、公共施設の整備（24.7%）よりも情報の提供（49.5%）や講座の充実（42.9%）を望む声が多いことなどから、既存の施設・空間をいかに効率的に運営し、有効に活用するかが問われています。

また、平成15年に実施された「第四次筑紫野市総合計画」策定における『市民アンケ

ート』調査によれば、「文化施設の整備」の要望について、前回（平成11年）の調査結果では26.6%だったものが34.5%へと増加しており、文化施設のなかには老朽化が進んでいるものもあることから、文化施設の整備についても行っていく必要があります。



市への要望（「筑紫野市生涯学習市民意識調査」より）



教育・文化について（第四次筑紫野市総合計画『市民アンケート』より）